

〔特別展に向けて〕

中国の鏡像について (浙江省・靈石寺塔出土鏡の背景)

鏡像とは鏡の表面に仏像などの尊像や梵字を線刻したもので、日本・中国・朝鮮半島で同様の形状のものが知られています。日本で紀年銘を持つ作例は十世紀末から認められ、それ以降、前述の三地域の中でもっとも盛んに制作されました。

日本には中国で作られたと考えられている鏡像が数点ありますが、本稿では中国にある鏡像のうち、2006年4月に行った調査をもとに、鏡像の一例について考察を行います。

靈石寺塔からは5面の鏡像がまとめて出土しています(宋時代黄岩博物館所蔵)。

靈石寺は浙江省台州の黄岩地区にあり、東晋隆安二年(403)の創建になります(図1 地図参照)。鏡像の出土した塔は北宋・乾徳三年(965)に着工、咸平元年(998)に竣工と考えられています。塔内に納められていた様々な供物に記された刻銘には呉越国王の錢俶(在位948-978年)や造塔の中心人物と見られる「経律大徳嗣卿」(名前が下線)の名前が見られ、多くの人々が関わっている様子が知られます。

「呉越国王俶敬造宝塔八万四千所永充供養時乙丑歳記」(乙丑：乾徳三年 鉄板に鑄造銘)

「丙寅歲当寺主経律大徳嗣卿造聞八月十二日記」(丙寅：乾徳四年：966 銅盒に墨書)

錢俶が建てた雷峰塔(浙江省杭州市)からは1点の鏡像が出土しています。

靈石寺塔から出土した5面の鏡像(図2以外の鏡胎は素文鏡)のうち、4面には鏡面中央部に四天王の一人がそれぞれ線刻され、像を囲むように鏡の縁に沿って銘文が刻まれています。図2は瑞花飛鳥鏡の鏡面に鍍錫を施し、尊像と銘文「西方毘樓博叉天王」(広目天)「乾徳四年丙寅九月十五日勾當僧帰進慕捨入塔永充供養靈石寺記」が刻まれています。線刻技法はどちらも槌を連打するのではなく、工具で引っ掻くように刻まれています。鏡背には、紐を通す鈕の脇に細い刻線で「僧志隆書」と認められます。

四天王は鏡面の中央に雲に乗った珍しい姿であらわされています。西方毘樓博叉天王も長く尾を引く雲上にはほぼ直立しています。細身の長身であらわされ、大きく目を見開き、鷲鼻と髭を具えた漢人らしからぬ風貌です。甲冑には花文様が施され、腰から魚を下げた様子は勇ましいというよりもユーモラスでさ

えあります。尊像は鏡面に対してやや小さめに描かれ、周囲に余白を大きくとっています。銘文を刻み込む場所をとっているとも考えられますが、錫を塗った鏡面の澄んだ表情と相まって、広々とした天空に天王が浮かんでいるようです。

銘文からは、造塔当初の乾徳四年に僧の帰進によって結縁施入されたことがわかります。四天王のあらわされた4面全てに帰進の名前とともに同様の銘文が刻まれています。ただ、「南方毘樓勒叉天王」のあらわされた鏡像には「咸平元年十一月廿四日重建此塔僧紹光寺記靈石寺」と銘文が続いており、咸平元年(998)にさらに僧の紹光が本鏡に関わっていることがうかがえます。また、銘文と図像の線が交わっている部分を観察すると、文字をよけて図像の線が引かれています。このことから、文字の方が図像よりも先に刻まれていることがわかり、あるいは、天王像は咸平元年の時点で刻まれた可能性が考えられます。

残る1面には、釈迦如来を中心とした諸尊が刻まれています(図3、書き起こし図)。釈迦如来の周囲には上方より左右に僧形、菩薩、天部が配されます。釈迦如来の坐す蓮華座は莖が長く波状に伸び、その左右に「僧保誠奉為」「息三友永充供養」、鏡の縁に沿って「咸平元年十一月廿四日記」、さらに鏡背に「僧志隆為」と刻銘があります。向かって右下の天部は前述の「西方毘樓博叉天王」鏡像の図像と酷似し、全体的にうねるような

曲線を多用する点や、線刻技法も同じです。また、両者の鏡背に同じ人物名が認められることから、やはりこれら5面の鏡像は、乾徳四年に鏡胎が施入され、造塔途中の咸平元年に釈迦如来像及び護法神としての四天王像が刻まれたと考えられます。なお、僧紹光は同じく本塔に納められた青磁香炉に墨書銘があり(「当寺僧紹光捨入塔壳捨咸平元年戊戌十一月廿四日」)、靈石寺の僧とわかります。

中国の鏡像は宋時代以降の作品しか確認されず、数も僅かですが、年代や使用状況が明確な作品の割合が多いことは大変重要です。また、靈石寺塔の位置する浙江省台州は日本から入宋した奄然が請来した木造釈迦如来立像(京都・清凉寺蔵)を雍熙二年(985)に造像した場所でもあります。この釈迦如来像の胎内からは水月観音を線刻した鏡像(図4)が発見されており、結縁の為に鏡像を施入するという宋代の使用方法が見えてきます。このように、年代の知られる初期の鏡像が現在のところ全て浙江省において、錢氏の強い影響下で制作されていることは大変興味深く、釈迦信仰との結びつきとともに中国における鏡像の成立に関わる重要な要素と考えられます。

(図2は浙江省文物考古研究所『浙江考古精華』1999.10文物出版社、図3は「浙江黄岩靈石寺塔文物清理報告」『東南文化』1991.5、図4は東京国立博物館『鏡像』1975より転載させていただきました。学芸部部員 瀧朝子)

図1 地図



図2 部分図



図3 書き起こし図



図4



季刊 美のたより No.155

平成18年7月7日

発行 大和文華館